

どんな経済を
めざす？

これからの主流は、

効率化・標準化されていないローカル経済。

地元で仕事が回っていく形をつくり、

顔の見える経済をつくりたい。

働くことの中に人間の幸せがある。だからこそ雇用の創出、経済的な自立が重要。経済が動かないと地域は主体的に動けない。

どんなに自然が豊かで、ゆったりとした田舎の良さがあっても、産業がしっかりと特徴を持って自立している地域でなければ暮らせない。

産業団地の整備を進めているが、かつてほどの雇用が生まれない。若い女性も好まないだろう。女性が魅力を感じる職場を作らないといけない。

経済が
動かないと
地域は主体的
に動けない

最近は工場ができるといっても無人化した工場が多いので、必ずしも雇用につながらない。事務系がないと女性の就職にもつながらない。

阪神全体でインバウンドを呼び込む、新しいサービスを開発するなど、地域でまとまって付加価値の高いものを生み出していないといけない。

産業振興でどんな施策を打てばよいのか正直困っている。地場産業同士の連携、民間と行政の連携など、いろんな連携策を戦略に取り入れていきたい。

ものづくりは地域に根差した雇用を生むため、製造業が発展する仕組みづくりが必要。

既存の製造業のみに頼っているのは県の産業の発展は大きく期待できない。

行政が形を作って民間にさせる従来型のやり方は限界。課題を示し、民間に取り組んでもらって、それを支援することが行政の役割になっていくだろう。

非接触型の
サービス産業
を伸ばす

今後、行政だけではできないことがますます増えるはず。住民、企業、団体などとチームを組んで取り組む形をもっと広げていく必要がある。

これから伸びる非接触型のサービス業にとって望ましい環境は何か。工場誘致という伝統的な政策の一方で、非接触型のサービス産業を伸ばす観点からどのような産業政策が必要かを考えることが重要だ。

大学の研究者や専門機関を気軽に活用して、多くの企業が最初の一步を踏み出している。更に行政の支援も受けながら、様々な企業がスモールスケールのDXを進めている。そうした未来になってほしい。

企業経営の刷新で一番障害となるのは経営者と言われる。長年の成功パターンを捨てられず、勉強もしない人が多い。

様々な企業が
スモール
スケールの
DXを

新しいライフスタイルが生まれ、そこでイノベーションが起こる。技術革新以上に、生活のイノベーションに伸びしろがある。

今後のものづくりでは、組み立てよりも、素材の発見や新しいモノを生み出す生産設備を持つことが大事。

ただ単に精密にものをつくるのではなく、機能美を加えたものづくりができる会社を兵庫県で実現したい。

ICTを駆使してものづくりを革
新的な産業に発展させたい。

地場産業が従来関わりのない業
種と連携することにより、新商
品の開発や産地ブランドの確立
に発展する。

伝統産業に
新たな要素を
取り入れる

職人が進化した科学技術を伝統
工芸に取り入れることで、伝統
工芸品が新たなステージへ昇華
していく。

伝統産業に現代の要素を取り入
れて革新すべき。

日本酒という地域に根付いた歴
史あるものに、スイーツという
新しい要素を加えただけで、資
金を外部からインターネットで
集めて、付加価値が生み出され
ている。

地域に小さな仕事を作っていくことが大事。地域にある仕事が、社会的に弱い立場の人たちの参加につながり、従来型の地縁組織の強化にもつながる。

ベンチャーだけでなく、もっと小さな起業を大切にすべき。

中堅中小の裾野を広げて、そこと先端を走る大手とをつないで、オール兵庫でシナジーを出す仕掛け作りが必要。

ローカル経済
を強くする

大企業中心ではなく、10~20人の中小企業を主流にしていくべき。麦もホップも自分たちで作ってクラフトビールを作る。地元の工務店に県産材を使って家を建ててもらおう。そんな動きを一つひとつ応援してローカル経済を強くしていくべきだ。

5000人の大企業1社より、10人の会社が500社集まって5000人分の仕事を生むのがめざす姿。

IV 自立した経済が息づく社会
10 循環する地域経済

効率ファーストではなく、ローカルファーストの経済に切り替えるべきだ。例えば東京ではなく、地元のクリエイターに発注する。そうしないとクリエイティブ産業は流出するばかり。

大企業中心ではない新しい経済が兵庫で広がれば、それに共感する人が集まって、もっとワクワクする地域経済の形が作れると思う。

若者がやりたがる、企画の面白い仕事は中小企業でこそできる。

効率ファースト
ではなく
ローカル
ファースト

持続可能な堅い地域経済をつくりたいのであれば、中小企業をじっくり育てるべき。

お金だけではなくて、もっと幅広いリソース、人や物が循環する社会にしていきたい。

サーキュラーエコノミーへの移行が一つの大きな方向性だが、兵庫でどういう仕組みや制度を作るか考える必要がある。

豊かさの定義が変わり、顔の見える経済が求められている。人口は減っていくのだから、より楽しく人口減少していけばいい。

面白い個人商店を増やすことが大切。個人企業、中小企業にもっと手を差し伸べてほしい。

地方経済をある種の護送船団方式のような形で地域の中で守り育てていくことが大切。

地域の商店から買うことでその店を応援する「応援経済」がこれからは重要だ。

顔の見える
経済が求め
られている

消費者がモノやサービスを地域の中で賄うというマインドになれば、画一的な大量生産・大量消費の市場を淘汰できる。

地域の中だけで頑張るのではなく、他の地域から多様なことができる人が入って力を合わせて運営していくことが必要。

地域の中で作ったものが地域の方に買ってもらえる仕組みというのは素敵だと感じる。

お金にならなくても、少し地域が面白くなる活動が増えれば、いろんな課題解決が進む。

地域課題をビジネスで解決し、地域内でお金が循環することで、自分たちで地域をつくることにつながればいい。

ビジネス的な
手法で
共助の形を
つくる

これからは共助が強い地域が生き残る。それをボランティアで支えてきたのがこれまでだとすれば、これからはビジネス的な手法で持続可能な共助の形をつくっていくことが大切だ。

お金中心の経済から脱却するビジョンを示したら、それに共感する若者が集まってくるはず。

共同作業をみんなでやっていく社会をつくりたい。それはお金との決別とも言える。

日本でダイバーシティを担保するためには自ら世界の情報を取りに行くこと、自分が外国人になったつもりで考えてみる必要がある。

大学が多すぎる。もっと専門学校などで、ものづくりの人材を育成しないと将来が危うい。

企業を守るのではなく、同一労働同一賃金の徹底など労働者を守る産業政策への転換が必要。

みんなで
リスクを
シェア

仕事をする組織は労働者組織のようなものが主体になっていくのではないかと。経営者だけがリスクをとるのではなく、みんなでリスクをシェアする仕組みが確立されてほしい。

ワーカーズコープは女性の働き場所や地域の問題解決の一つの受け皿になり得る。

ワーカーズコープが地域の様々な課題を解決する一つの糸口になるのではないかと。

どんな農業を
めざす？

都市近郊では、

鮮度感に特化した品目を生産するなど、

土地のポテンシャルを

もっと生かすべき。

農業のイノベーションの方向ははっきりしている。いかにおいしいものを人の手をかけずに効率的に作るか、それをいかに直接消費者に届けるかだ。規制の撤廃も含めてこれを徹底できれば農業は主力産業になる。

兵庫はもっと農業で稼げるはず。デジタル化で大きなイノベーションも期待できる。農業を産業政策のメインに据えるべきだ。

農業を
産業政策の
メインに

今後日本の食料自給率の低さがシビアな問題になる。日本は大型化、スマート化すれば、もっと農業で稼げる国になれる。

法人化して軌道に乗れば、必ず大規模化に移行していく。優良農地を集めて一気に耕作するという風に自然となっていく。

農業政策で金持ちしか買えないような高級食材に力を入れるのは違うと思う。

大事なものは、何人来るかではなくて誰がくるか。1人でやっていく人ではなく、100人雇える人材に来てもらう必要がある。

産地を作るべきなのにも関わらず、今はいろんな作物がごちゃ混ぜになっている。その構成自体がおかしいという認識をまず持つべきだ。

果樹にしても何にしても産地は集中している方がよい。

兵庫の農業の
戦略がほしい

スペインのサンセバスチャンがすごいというが、淡路島もそのようになれる可能性がある。

五国それぞれ食材も違って豊富なので、一流のシェフが県内を巡回しながら、各地の食材を使って新しい料理を作り、地域の人と一緒に楽しむシェフインレジデンスができないか。

小規模で小さく光る農業もしっ
かりつくっていくことが県全体
の中では大事な視点である。

地元の旬のものを食べると移動
のコストと余計なエネルギーを
使わずに済む。

小規模で
小さく光る
農業もつくる

大規模化だけでなく、兼業農家
や自給+ α で農業をしたい人と
の共存もめざすべき。

旬のものは健康にいい。弱点は
その時一斉にできるので、食べ
飽きる。だが、それが自然の理
にかなっていて、エネルギーも
余計にかからず、結局楽である。

遠くに送るのではなく、地元で活かす社会にならないといけない。そして規格外も生かす。

新鮮な農産物が入手しやすい環境が整い、地域の農家と交流する機会があり、地元食材に興味を持つ人が増えていて欲しい。

兵庫の豊かな食文化を残していきたい。例えば山菜を使った料理教室や学校での山菜狩り体験、給食での山菜提供など、小さい頃から山菜を知る取組を行っていく。

遠くに送る
のではなく
地元で活かす

兵庫でちゃんと栽培したら大産地になれるのに、最初から地産地消では、自分からハードルを下げているようなもの。主従を間違っはいけない。

スーパーで売ってもらおうという発想自体が古くなり始めている。スーパーで買い物する時代は近いうちに終わる。

11 進化する御食国

夢は、農業を面白いと思う人を増やすこと。物を作ることから経営までできる。やったことが結果にそのまま出るところも面白い。

自分で育てた野菜を食べる楽しみを感じたり、仲間へ分け合ったりすることで、人とつながり、農業を通して生きがいを感じることができる。

農村は今後圧倒的に女性高齢者が一人で住んでいる社会になる。風通しが良くなり、封建的な雰囲気ガラッと変わる可能性がある。

農業を軸に
面白い地域を
つくる

農業で生産者、生活者、いろいろな分野の人たちがうまくつながれる仕組みを作っていくことが大事だ。「助けて」と言える関係を作っていく必要がある。

助け合いながら農業ができるコミュニティがあればいい。

農家同士のつながりができれば、もっと雇用がしやすくなる。

兵庫県は日本海と瀬戸内海という2つの海に面しており、多種多様な水産物が獲れる場所。海の豊かさを守ることをより重要視すべきだ。

豊かな海と言われた瀬戸内海の漁獲量が激減している。要因は栄養塩不足だけではない。温暖化の影響で、南方系の生き物が侵入するようになった。

海の
豊かさを
守る

絶滅危惧種を救うというような形で、兵庫が最先端の養殖技術で世界をリードするようなことも考えたら面白い。

イカナゴの不漁や森林の荒廃に心を痛めている。

徹底したDXで一次産業の固定概念を払拭してほしい。農村の魅力も向上させることができる。

スマート農業が発達し、手間のかかる作業は機械が担っている。ベテラン農家のノウハウがAIに蓄積され、若い人でも農業を始めやすくなっている。そんな姿になるだろう。

農業をデジタル化して魅力を高めることも重要。豊かな自然が若い人の活躍の場になることを期待。

農業を
デジタル化
して魅力を
高める

スマート農業は土に触る大切さを否定するものではない。テクノロジーできちんと基盤ができれば、自然の土にさわる農業の方も、もしかしたらもっと良くなるかもしれない。

農業ロボットの活用に期待をしている。ロボットの活用が進めば、休耕田なども活用されるのではないか。

高度で高額なロボット技術ばかりでなく、もっと身近で、安価に導入できるようなレベルのスマート農業を求めたい。

自分の手で土を耕すことに価値観を持っている若者も多い。スマート農業とかフルオート農業といったハイテクは、人から豊かさを奪ってしまうこともある。

どんな人でも
働きやすい
農業に
変える

スマート農業は儲けるためよりも、どんな人でも働きやすい農業に変えるためにこそ必要。

スペースがあったら各家庭で簡単に作物を作れるような技術の普及も大事だ。

食料自給率を高めるために効率化する必要がある、工業化していかないといけない。空き地に大規模ハウスを作って水耕栽培を行う。こうした都市農業を産業化すべきだ。

誰にでも食料が行き渡る社会を行政も考えないといけない。

誰にでも
食料が行き渡る
社会へ

食べられる農作物であっても商品価値がないことにより、やむを得ず廃棄する場合がある。それらが流通して有効活用される仕組みを作らないといけない。

賞味・消費期限が近い食品は県内で衛生的に分配される。期限が切れた食品は肥料として再加工され県内の食糧生産に利用されることで、地産地消の一助となり県内での食の循環を促す。そんな未来をつくりたい。

どんな移動手段
を望む？

60kgの人を運ぶのに2tの鉄の塊が動いている。

未来の交通を考えるときは、

もっと環境にやさしい、ヒューマンスケール、

ヒューマンスピードの乗り物を大事にすべき。

バスの便数が減って使い勝手が低下している。高速道路の整備よりも、利便性の高い公共交通機関の整備が重要だ。

高齢者が運転免許を返上しなくてもよい県になってほしい。年を取って運転をあきらめた途端にシルバーカーしか選択肢がないというのは悲しすぎる。

間違いなくITインフラの差が地域の差につながる時代になる。

高速で快適
以外の選択肢

道路政策の頭の切り替えが必要。「高速で快適に走る道」以外に、車が減るのに合わせて車線を減らすことも含め、コミュニティが育つ道、コミュニティが育つ交通を考えていく必要がある。

通信の発達により、距離の概念が終焉すると言われてきたが、実際は、通信で情報量が増えた結果、face-to-faceのコミュニケーションの価値が高まり、移動が増える結果になっている。

高速道路が整備され、姫路、福知山、豊岡が通勤圏になったが、逆に和田山が通過点となっていく可能性がある。

交通の便が良い駅近に高齢者も含めて人が集まっている。ニュータウンをリニューアルして市内で人口を流動させたいが、明石や西宮などに出て行ってしまふ流れが強い。やはり駅前再開発の力が大きい。

「駅」が鍵
駅前再開発の
力も大きい

今は役場周辺から鳥取中心部まで30分程度だが、6年後に高速が全線開通すれば、更に短縮される。鳥取は町内と同じという感覚になるだろう。

やはり「駅」が鍵だった。駅の近くに住むスタイルに合わせて、駅を中心としたまちづくりを今からでも始めないといけない。

今元気なのはJR沿線の自治体。JR神戸線沿線の地域は残っていくだろう。

職住近接の流れがあるので、自転車通勤のしやすさは一つのポイント。自転車の走行環境を整備して、自転車で暮らせるまちを打ち出すことも考えられる。

環境にも健康にもいい交通手段である自転車で快適に走り回れる道路網が整備されている兵庫県をつくってほしい。

自転車で
暮らせるまち
を打ち出す

ゆっくり移動するという価値観が広がらないか。

コロナ禍で自転車通勤の人が増えたことを契機に、安全な自転車専用道の整備に力を入れてはどうか。

自転車をバスや電車に乗せられるようにするなど、自転車で県内をどう動きやすくしていくかということをもっと考えないといけない。

土砂災害や河川氾濫、津波の危険がある区域の開発規制を強化するなど、防災はまちづくりから見直すべき。

国土強靱化は、投下する資金に対する効果に疑問を感じる。社会としての危機管理対策を日頃から練って準備しておくことの方が重要だ。

過疎地域を集約し、人はより安全な場所に居住するようにすべきだ。

危機管理対策
を日頃から
練って準備

災害が起こったとき、必ず地域住民との助け合いが必要になる。スムーズに助け合いができるよう普段から、地域コミュニティを大切にする社会にしたい。

ハードだけでなく、協働、支援、助け合いで安全の基盤を確立する必要がある。

次の危険なウイルスが出たときに、私たちがどのような生活をめざして適応していくのかという視点は、二度と震災や水害を起こさない地域になるということと同等に重要な項目だ。

次の危険な
ウイルスにも
備える

世界に誇る医療産業都市があるのに、なぜもっと早くワクチンや治療薬ができないのか。

自然災害だけではなく感染症に対する危機管理も重要と気付いた。コロナ禍の経験を活かして防護用品の備蓄やノウハウの蓄積をすべき。